# ［Enter into NP］の概念研究

## ――認知言語学的アプローチ――

森　山　智　浩

## 1．はじめに

本研究に着手し始めた経緯は，或る学生から「Enter という英単語に into という前置詞を共起させると，enter 単独で用いられる場合と比較してなぜ意味が変わるのか」という主旨の質問を受けたことに端を発する。言葉を変えれば，これは「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，この場合はなぜ“into”でなければならないのか」という質問内容とも等価に見なし得る。筆者が知る限り，確かに，そのメカニズムを簡潔にでも解説した学習参考書は存在していない。また，以下(1)に示されるように，手元の辞書を見ても主にその意味用法・定義などが記されているだけで，同様の結果が得られるのみである(1)。

(1)　1　to begin to discuss or deal with sth
　　2　to take an active part in sth
　　3　［no passive］to form part of sth or have an influence on sth
―*OALD*（s.v. enter into sth）

(1)　本稿では，抽象的事象表示の［enter into NP］の意が主に本論1.(1)で定義される場合を中心に取り扱うものとする。

当該学生の真意に拘らず，この質問が示唆する内容は高等教育における現在の英語教育の在り方に大きな問題を提起しているように感じてならない。現行，学習対象言語における運用力の育成や資格の取得に重点が置かれており，それは筆者も否定するものではない。しかしながら，その一方で，日本語を母語とする学習者にとって明らかに自身の母語構造とは異なる外国語を学ぶ際，種々の意味論的（或いは統語論的）疑問が生じるのは必然の流れであろう。そのような状況下，「形式とその日本語訳を一つひとつ機械的に丸暗記していきなさい」と指導することは容易であろうが，そうした知的欲求に応えるだけの教育内容の整備もなされなければ，「知の教育」の成就にあたって十分条件には至らない恐れがあるのは言を俟たない。

そこで，脳内活動の結果事象である言語表現から英語母語話者の認識構造の一端を明らかにすることも見据え，本稿では，英語動詞句［enter into NP］について下記（２ａ-ｃ）の論考に主眼を置く。

⑵　ａ．「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，なぜ enter を自動詞として用いる必要があるのか」また「その場合に，なぜ into という前置詞がその姿を現すのか」に関する意味生成のメカニズムについて

ｂ．「上記ａから得られる認知メカニズムが他の英語表現にも適用され得るかどうか」に関する反証可能性および再現性について

## ２．先行研究の考察

### 2.1.　Yoneyama（2005）

Yoneyama（2005: 45）では，まず，Klipple（1997）においてそれぞれ

英語・フランス語実例を示す以下⑴―⑵を挙げ，ロマンス語起源の英語動詞 enter がなぜそれとは異なる統語的振舞いを示すかについての問題提起が行われている⑵。

⑴　He entered（*into）the room.

⑵　Il est entré *(dans) la salle.

―Klipple（1997: 86）

これは同じロマンス語に属するルーマニア語についても同様で，英語動詞 enter の概念表示に相当する intra が物理的三次元空間内部への移動を表示する場合，英語前置詞 in（to）の概念表示に相当する în を後続させなければならない⑶。

---

⑵　以下［1］に示されるように，現代英語 enter の概念表示に相当するラテン語 intrare は他動詞・自動詞両方の形で，フランス語のそれは自動詞のみの形で用いられる。

［1］late 13c. *entren,* “enter into a place or a situation; join a group or society”（trans.); early 14c., “make one's entrance”（intrans.), from Old French *entrer* “enter, go in; enter upon, assume; initiate,” from Latin *intrare* “to go into, enter”（source of Spanish *entrar,* Italian *entrare*), from *intra* “within,” related to *inter*（prep., adj.）“among, between”（see *inter-*). Transitive and intransitive in Latin; in French intransitive only. From c.1300 in English as “join or engage in: (an activity);” late 14c. as “penetrate,” also “have sexual intercourse (with a woman);” also “make an entry in a record or list,” also “assume the duties”（of office, etc.）. Related: *Entered; entering.*

―*Online Etymological Dictionary*（s.v. enter, *v.*）（下線筆者）

⑶　ルーマニア語はギリシア語・スラブ語・ハンガリー語・トルコ語・フランス語などの借用語彙が多く，かつ，文化的にローマ・カトリックの影響をほとんど受けていないものの，インド・ヨーロッパ語族イタリック語派に分類され，ラテン語の東部地域における方言（バルカン・ロマンス語派）に位置づけられる。

⑶　a．El a intrat în cameră.

He entered　into the room[4]

b．*El a intrat cameră.

このような振る舞いの相違に関し，Yoneyama（2005：48）では，次の⑷―⑹に示される Klipple（1997）の見解に対しての検討がなされている[5]。

---

⑷　本稿で扱うルーマニア語文について，適宜，その各語句に英語訳を付す。なお，ルーマニア語は，スペイン語など他のロマンス諸語と同じく，名詞は性（gender）を持ち，形容詞，冠詞は名詞の性・数・格に応じて変化する。ルーマニア語の品詞は名詞・形容詞・冠詞・代名詞・数詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・感嘆詞の10種類であり，このうち，はじめの６品詞は語形変化を持つ。また，本稿で用いられているルーマニア語実例は計６回に渡ってルーマニア国で実施された筆者の言語文化学術調査（2008-2014）による研究成果の一部に基づくものであり，当該活動期間，特に以下のルーマニア語母語話者の協力を得ている。

［１］Nicolae Mirică（電気エンジニア・男性・54歳），Emanuela Mirică（小売商・女性・49歳），Oana Moriyama（心理学士・女性・30歳），Bogdan Mirică（オペラ歌手・男性・29歳），Valentina Moldovan（バレリーナ・女性・29歳），Daniela Moldovan（バレリーナ・女性・29歳），Enache Niculina（機織手・女性・76歳），Viorica Mirică（無職・女性・74歳），Gheorghe Chingaru（不動産・男性・53歳），Adriana Chingaru（家政婦・女性・50歳），Radu Chingaru（大学生・男性・30歳），Alin Manea（エンジニア・男性・48歳），Mihaela Manea（教授（地理学）・女性・45歳），Evelin Manea（大学生・女性・26歳），Gabriela Manea（大学生・女性・23歳），Sorin Moise（軍人・男性・44歳），Mirela Moise（企業秘書・女性・41歳），Mircea Mirică（工場長・男性・40歳），Raluca Mirică（家政婦・女性・38歳），Adrian Mirică（学生・男性・17歳），Gabriela Suciu（バレリーナ・女性・34歳），Miruna Moldoveancu（バレリーナ・女性・28歳），Dumitru Elena Daniela（モデル・女性・27歳）

当該調査期間，故 森山元嗣（2009年２月逝去）・故 国澤澄子（2011年１月逝去）・故 森山さくら（2008年９月逝去）諸氏にも常に多大な協力・支えを頂いた。以上の方々には，この場を借りて心から深くお礼申し上げる。

⑸　ここでの SF, REL, D/A はそれぞれ，以下［１］―［３］の定義を示す（cf. Yoneyama（2005: 46-47））。↗

(4) In English, the conceptual D/A node does not have to be conflated with the verb at syntactic structure. D/A can be expressed outside of verb in syntax.

(5) In French, the conceptual D/A node must be conflated with the verb at syntactic structure. D/A cannot be expressed outside of V in syntax.

—Klipple（1997: 86）

(6)

| | |
|---|---|
| SF into REL | (French and English) |
| REL（and SF）into D/A | (English only) |
| D/A into V | (French) |
| All into V | (English, at least) |

—Klipple（1997: 95）

そして，これらの考え方を踏襲しながら，Yoneyama（2005: 50）では下記(7)の論考が展開されている。

(7) If *enter* follows the French conflation, pattern, it will include D/A. Further, in English, REL（and SF）will be conflated into D/A; therefore, REL（and SF）will also be included in the verb. This is why *enter* incorporates the entire prepositional meaning.

---

↘ ［1］SF: a function that takes a thing and a place that is determined in relation to that thing

［2］REL: a two-place predicate that takes a place as internal argument and yields a one-place predicate, the property of being at that place

［3］D/A: the trajectory of an event of motion or orientation, often instantiated by particles

On the other hand, *enter* seems to be subject to the English conflation pattern. In this case, *enter* loses its inherent motional sense. The same is true of *break*. Consider the following example:

⒅ The sun broke through the clouds and shone upon a vast, undulating white path.（Keler（1902: 41））

—Yoneyama（2005: 50）

確かに，SF, REL, D/A の各々の観点（或いはそれらの複合的観点）から「（物理的移動表示を実例として）英語 enter がロマンス諸語における同概念表示語とはなぜ異なる統語的振舞いを呈するか」を見つめた Yoneyama（2005）の論考は十分な説得力があり，筆者も大いに参考にした。しかしながら，前出1.（２ａ）の問題を解決する上で，以下⑻—⑽の論考も加味しなければ，必要条件にはなり得ても十分条件には至り難いと考えられる。

⑻ 以下ⓐに示される通時的見地に基づくと，物理的移動事象を表示するのに古くは英語でも［enter into NP］の形態が用いられていた。

ⓐ Go into の意味で古くは enter *into* を使って，And from hence he arose, and. . . *entered into* an house.—*Mark* vii. 24（起ちて此処を去り…家に入り）のような例は聖書や Shakespeare には多いが，今日では前置詞なしに enter a house, a carriage のように，また become a member of の意味でも enter a school, club, the army のように言う。

—日下部（1955）（下線筆者）

したがって，厳密には，「古くは英語でも物理的移動表示に［enter

into NP］の形態が用いられていたが，SF, REL, D/A の各々の観点を通して，現代英語では，同物理的移動（およびその直接的な写像関係にある抽象的移動）表示には［enter NP］の形態へと変化した」とする説明がより妥当であると考えられる(6)。

(9) 上出(7)では“*enter* loses its inherent motional sense”と記されているが，上記（8 a）の歴史的変遷を鑑みると，物理的移動事象を表示するのに古くは英語でも［enter into NP］の形態が用いられていた事実が確認され，本来的な移動概念が失われたどころか，むしろ同概念が部分的にでも依然として保持されていると考える方が論理に適う。事実，*Online Etymological Dictionary*（s.v. enter, *v.*）では，“enter into a place or a situation; join a group or society”として物理的移動概念および抽象的移動概念表示の意味用法が現れたのが13世紀後半，“join or engage in:（an activity）”として抽象的移動概念表示のそれが現れたのが1300年頃と記されている(7)。さらに，*OED*（s.v. enter, *v.*）によると，前者における物理的移動概念／抽象的移動概念表示の意味用法の初出はそれぞれ，1280年頃／1290年頃となっている。したがって，中英語期には自動詞としての用法がはるかに優勢であり（cf. *OED*（enter, *v.*）），かつ，現代英語の［enter NP］／［enter into NP］各々によって表示される意味概念が英語史上ほぼ同時期に出現しており，当時

(6) ここで「直接的」と記した理由について詳しくは，本論3.1.にて論述。

(7) 本論2.1.(7)では，いわゆる“join or engage in”の意を優先して“*enter* loses its inherent motional sense”と記述されている可能性もあるが，もしそのように仮定した場合，それは辞書などに記載されている定義に重点を置いており，あくまでも「概念的」見地に立脚した本論の主旨とは異なる。言うまでもなく，“join or engage in:（an activity）”という事象を遂行するには，対象となる組織や活動の「内部」に抽象的に「移動する」概念化が必要となる（詳しくは，本論3.2.3.2.にて論述）。つまり，本論の立場としては，そこに［ENTER］とい↗

はいずれも［enter into NP］で表示されていた歴史的事実を踏まえると，その事実と現代英語の［enter into NP］が“*enter* loses its inherent motional sense”とする説とでは整合性が成立し難い。

⑽　また，たとえ共時的な観点のみから［enter NP］を出発点とし，［enter into NP］では本来的な移動概念が失われたと仮定しても，以下⒜のような事象表示にはなぜ（ロマンス諸語における同概念表示動詞句と同じ形での）自動詞形態を保たなければならなかったのか，という元の問題に戻ってしまう。

⒜　Let's not *enter into details* at this state.

—*OALD*（s.v. enter into sth, 1）（イタリック筆者）

ここで，認知言語学の視座に立脚する。同視座において，品詞の種別の如何に拘らず，語句の意味変化の多くは具象から抽象への一方向的表示であってその逆ではない。また，その概念写像に伴う統語的振舞いも具象的事象表示時の根源構造が継承されるのが通常である。その一例として，次

---

↘う形態が用いられている限り，何らかの移動概念，すなわち「抽象的移動」概念（厳密には「抽象的三次元空間の外部から内部への位置変化」概念）が部分的にでも生きているという立場を優先する。この点については本論2.2.—2.3.各々で観察する先行研究見解と同じくする。他方，この“*enter* loses its inherent motional sense”という記述について，「なぜ失われるのか」については触れられていない。また，「その消失対象がenterの概念すべてに関るかどうか」，「関る場合はここでの enter はゼロ概念表示なのか」，「関らない場合は如何なる非移動概念が残されるのか」という諸問題に対する十分な記載は見受けられなかった。さらに，ここでの“its inherent motional sense”が「物理的移動」を指示すると仮定した場合であっても，それは抽象的移動事象表示に用いられるすべての移動動詞に当てはまることであり，同時に「では，抽象事象表示における［enter NP］/［enter into NP］各々の意味論的差異が生じる概念的理由は何か」という問題の解決にも至り難いと考えられる。

の⑾を見てみよう。

⑾　Demo: And, normally I believe everybody needs to walk their own path, but just you're not walking yours.　Okay？　You're sitting near the path, on a rock.

—映画 *Failure to Launch*（2006）〈00:58:23〉[8]

上記⑾が表す事象の背後にはLIFE IS A JOURNEYという構造のメタファー（STRUCTURAL metaphor）が機能しているが，ここで“walk their own path”や“walking yours”という目標領域（target domain）としての抽象的事象を表現するには，その直接的写像関係にある根源領域（source domain）にある具象的事象表示にも必然的に同様の統語構造が存在していなければならない。事実，下記（12 a - b）では，「物理的移動」表示としての walk の他動詞用法が確認される。

⑿　a．They love *walking the moors.*

—*OALD*（s.v. walk, *v.* 2）（イタリック筆者）

b．Travis: Take the freight elevator to eighteenth floor, and you *walk the rest of the way.*

—映画 *The Negotiator*（1998）〈01:04:54〉（イタリック筆者）

つまり，上出（10 a）のような「抽象的事象」表示としての［enter into NP］に，この論理に基づく直接的写像関係が適用されるのであれば，通

⑻〈　〉内の数字はそれぞれ，当該セリフが同映画 DVD 内で生起する〈時間，分，秒〉を示す。ただし，TVドラマについては生起タイムを記さない。以下同様。

常，その根源領域と見なされる「具象的事象」表示にも同様の統語構造が存在していなければならず，実際，前出（８ａ）の歴史的事実が物語るように，古くは英語にも物理的事象表示に同形態が用いられていた。したがって，認知言語学的視座においても，結局は何らかの「移動」概念の写像が行われているとする前出⑻の捉え方が支持され，⑽のように「［enter NP］を出発点とし，［enter into NP］では本来的な移動概念が失われた」とする説では歴史的事実との整合性を取り難い[⑼]。

こうした問題に関連して，Yoneyama (2005) では，前出⑺の中で［break NP］を挙げ，［break through NP］との関係から，［enter NP］と［enter into NP］の関係を論じようとする試みがなされている（当該部分を以下⒀として再掲）。

⒀ On the other hand, *enter* seems to be subject to the English conflation pattern. In this case, *enter* loses its inherent motional sense. The same is true of *break*. Consider the following example:

---

⑼ 時に「認知言語学研究に歴史的観点は必要ない」とする声を耳にする。しかしながら，言葉は人間の社会文化・文明の発展・変化と共に発達してきたことから，そこに光を当てることは「如何にして外界と関り合ってきたのか」という人間の思考の進化・変化の過程を明らかにすることに他ならない。したがって，現象学（および情報学）の論拠も踏まえながら，認知言語学の本質があくまでも以下［１］であるとするならば，極めて物理的な事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた思考様式の進化・変化の過程の一端を明らかにする上で「歴史的観点」は欠かすことができないと考えられる。詳しくは森山（2008）参照。

［１］メタファー論とカテゴリー論の２つを主幹とし，身体活動，知覚器官，さらには社会・文化環境との相互作用によって得られた「人間の本性の産物（products of human nature)」(cf. Lakoff and Johnson (1980:118)）を脳内活動の結果事象である言語表現から見つめる認知科学領域研究

⒅ The sun broke through the clouds and shone upon a vast, undulating white path.（Keler（1902: 41））

―Yoneyama（2005: 50）

しかしながら，認知言語学的視座では非常に重要なことなので繰り返し述べるが，次の（14 a - c ）の観点から，厳密には［enter NP］と［enter into NP］の概念的関係は［break NP］と［break through NP］のそれと等価ではない。

⒁ a．まず，ここで挙げられている［break through NP］は具象的事象表示であって，通常，現代英語では主に抽象的事象表示で用いられる［enter into NP］とはその形而関係の次元が異なる。

b．ここで［break through NP］を挙げるのであれば，たとえば次の実例のように，［break through NP］そのものについて，その具象表示と抽象表示のいずれであっても同じ統語構造が存在している（つまり，いずれの表示にも［break through NP］が用いられる）事実を踏まえる必要がある。

・Cole:

The exhaust fumes *broke through* the firewall and carbon monoxide knocked Buddy out.

―映画 *Days of Thunder*（1990）〈01:23:33〉（イタリック筆者）

・Dai-Gurren-Dan:

We'll *break through* heaven and dimen-sions ! We'll show you our path through force !

― TV ドラマ *Tengen Toppa Gurren Lagann*（2007）（イタリック筆者）

c．他方，以下に示されるように，確かに，現代英語における［enter into NP］はその限りではない。

- Let's not *enter into details* at this state.
- *Let's not *enter details* at this state.
- *He *entered into* the room.
- He *entered* the room.

しかしながら，［enter into NP］が［break through NP］の位置づけに相当するのであれば，［enter into NP］の抽象的事象表示への写像関係において同じ統語構造を用いた具象的事象表示がその根源領域として存在しなければならない。この点で，それが（現代英語では失われたものの）前出（８ａ）に見られるような物理事象表示の［enter into NP］であると想定される通時的見解の導入意義が確認される。したがって，English conflation pattern を考慮する一方で，意味論上は「［enter into NP］の enter が本来的な移動概念を失っているのは［break through NP］の break にも当てはまる」とするだけでなく，以下の見地からも議論すべき問題であると考えられる。

- SF, REL, D/A の各々の観点を通して現代英語 enter がロマンス諸語における同概念表示語とは異なる統語的振舞いを呈するようになったにせよ，物理事象表示の［enter NP］を出発点として［enter into NP］と直接的に比較・対照するのではなく，「古くは英語でも具象的事象表示に用いられていた［enter into NP］の移動概念が如何にそこに関っているのか」，また「現代英語に至っても，前出（10ａ）のような抽象的事象表示のときにだけ，なぜ［enter into NP］の形態が保たれているのか」という意味論的観点

これらの点も考慮してか，Yoneyama（2005: 51）では下記⒂―⒃の Ritter and Rosen（1996）を引用し，以下⒄のように述べられている。

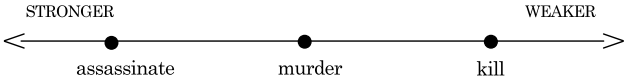
⒂ a．Martha ran to the store. “dash”
b．Tears ran down the child's face. “flow”
c．Martha ran Fred to the station. “take”
d．Martha ran a successful campaign. “manage”
e．Fred knows how to run the fax machine. “operate”

⒃ a．Martha walked to the staion. “go on foot”
b．*Tears walked down the child's face.
c．Martha walked Fred to the station. “accompany on foot”
d．*Martha walked a successful campaign.
e．*Fred knows how to walk the fax machine.

―Ritter and Rosen（1996: 39）

⒄ ⒆［＝⒂］and⒇［＝⒃］demonstrate that weak verbs have fewer syntactic restrictions. Riter and Ronsen argue that *walk,* a strong' verb, encodes a highly specific manner of motion that restricts the possible extensions of this verb. On the other hand, *run,* a weak' verb, does not specify a particular manner, and consequently may be used to refer to many different event types. The same is true of the verbs *kill*, *murder*, and *assassinate*. Ritter and Rosen propose the following strength continuum:

㉑




（Ritter and Rosen（1996：44））

They maintain that ㉑ accounts for the following contrasts:

㉒　a．Someone killed /murdered/assassinated the senator.

b．Someoen killed/murdered/*assassinated our neighbors.

c．Someone killed/*murdered/assassinated the squirrel.

d．The shock killed/*murdered/*assassinated the senator.

（Ritter and Rosen（1996: 46））

―Yoneyama（2005: 51-52）（［　］内注記筆者）

しかしながら，上記⒂―⒄の視点には幾許かの疑問が残る。その主たる理由を以下（18 a - b）に挙げる。

⒅　a．そもそも，［run-walk］の関係と［kill-murder-assacinate］のそれとは等価ではない。なぜなら，後者は murder, assacinate が kill の下位区分に当たるという「階層構造」で捉えられるのに対し，前者は walk が run の下位区分には当たらないという「非階層構造」で捉えられるからである。

b．上記 a の見解と密接に関連するが，［kill-murder-assacinate］の関係において，たとえば murder, assassinate の意味概念はそれぞれ［kill＋MANNER: DELIBERATELY and ILLEGALLY］/［kill＋MANNER: DELIBERATELY and ILLEGALLY・patient: IMPORTANT or FAMOUS PERSON］で捉えられるように，［kill＋$\alpha$］の構造で表示し得る。他方，統語上の制約に話題の中心があったにせよ，意味論上［run-walk］にはそうした階層関係

が適用されず，そもそも run と walk とでは各々の意味概念構造が大きく異なる[10]。［kill-murder-assacinate］のような関係で捉えようとする場合，たとえば［walk-plod-totter-tramp-strut-stalk-shuffle. . .］（cf. 池上（1975: 306–307））などと比較検討することが適切であると考えられる。

Yoneyama（2005:52）では，上出⒄の記載に続く形で次の⒆を記し，“Although *enter*（*into*）is similar to *go into*, the weak/strong distinction reduces the range of possible syntactic structures in which *enter into* appears.”として論考を閉じている。そこでは，“It seems to me. . . .”と述べられているように，主に統語的制約の強弱に焦点が当てられていることもあり，上出（14ｃ）および上記（18ａ-ｂ）の問題との意味論的整合性には深くメスが入れられていない。

⒆ It seems to me that *enter*（*into*） is stronger than *go into*. Consider the following examples, cited from Ichikawa, et al.（eds.）（1995）:

⒇ ａ．go into the room
　　ｂ．enter the room

㉑ ａ．go into particulars
　　ｂ．go into law
　　ｃ．enter into particulars

㉒ ａ．The old women went into hysterics/a rage.
　　ｂ．The audience went into convulsions of merriment
　　ｃ．go into debt

⑽ 詳しくは森山（2012）参照。

(23)–(25)　indicate that *go into* has fewer syntactic restrictions.

### 2.2.　瀬戸 他（編）（2007）（*DELP*）[11]

*DELP*（s.v. enter, *v.*）では，英語動詞 enter のネットワークが以下(1)として分析されている[12]。

(1)「〈人・物が〉〈場所に〉入る」が中心義。原因的意義「〈物を〉（場所に）入れる」はまれだが，ここから派生する比喩義「〈文字などを〉（記入欄などに）書き入れる」は頻度が高い。中心義は，「何が」と「どこに」の部分の抽象度を変えて，「〈人などが〉〈組織・競技などに〉入る」「〈考え・感情などが〉〈人（の頭・表情など）に〉入る」「〈物事が〉〈人（の生活など）に入り込む〉」の意義に展開する。入り込んだものは，そこで何らかの役割を果たす。

—*DELP*（s.v. enter, *v.*）

そして，［enter into NP］については，同見出し語の第三項目に次の(2)が掲載されている。

(2)〈人・物事が〉〈活動・状況などに〉入る：〈職業などに〉就く，〈活動などを〉始める，〈ある時期・段階に〉入る，（活動などを）

---

(11)　*DELP* は辞書であるものの，「一言で述べれば，個々の多義語に中心義を定め，そこから意義展開パタンに基づいて意義展開を跡づけ，もって意味ネットワークの全体を記述する」（*DELP*（まえがき））という方法論に則って編纂され，「メタファーなどの意義展開パタンで多義語を包括的に記述した，初めての辞典」と謳われていることから，先行研究の一つとして扱うに値すると考え，論考を進めた。

(12)　*DELP* では，一単語内の多義のつながり・意義展開が「ネットワーク」と名付けられている。

始める，し始める （(into, on)）

—*DELP*（s.v. enter, *v.*）

辞書としての特性上および紙面の都合上の問題が大きいのであろうが，いずれにしても，本稿冒頭で挙げた「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，なぜ enter を自動詞として用いる必要があるのか」また「その場合に，なぜ into という前置詞がその姿を現すのか」に関する意味生成のメカニズムについての記載は見当たらない⒀。

### 2.3. 小島 他（編）（2004）（*DEWME*）⒁

*DEWME*（s.v. enter, *v.*）では，英語動詞 enter における語義全体のつながりが以下⑴として分析されている。

⑴ 本来他［一般語］一般義ある場所，建物，室などに入る《語法 come in, go in に比べると形式ばった語》．その他学校や団体など

---

⒀ *DELP*（s.v. enter, *v.*）における第三項の notes には，以下［1］として［enter into NP］の「語用」に関る記載は見受けられる。

［1］enter into は「いまから…し始める」という意味合いが強いので，一般に into の後には不定名詞句が現れやすい。たとえば，conversation とのコロケーションは，enter into conversation（会話を始める）の頻度が高く，定名詞句との共起は，enter the conversation（〈人が〉既存の会話（の輪）に加わる），〈話題などが〉特定の会議に出る）の頻度が高い。discussion との共起についても，ほぼ同じ傾向が見られる。

—*DELP*（s.v. enter, *v.*）

⒁ *DEWME* は辞書であるものの，「本書では語義を「一般義」（最も普通の意味）と「その他」の二つに分けるだけで番号付けはせず，語義全体のつながりをできるだけ物語風に展開した．このようにすることによってある語の語義の全体像をかなり容易に見ることが可能になるのではないかと考えたからである」（*DEWME*（まえがき））という主旨に則って編纂されていることから，先行研究の一つとして扱うに値すると考え，論考を進めた。

に入学［入会］する，人を入学［入会］させる，書類に名前や日付などを記入する，競技などに登録する，さらに新しい仕事などに入ることから，始めるという意味にもなる．㊀入る，入学する，加入する，…に参加を申し込む《for》，交渉や議論，仕事などに取りかかる，始める《into》，人の気持ちなどを察する，共鳴する《into》．

—*DEWME*（s.v. enter, *v.*）[15]

そして，［enter into NP］の語法について，次の⑵のように記述されている。

⑵　語法❶㊁の場合でも，受身は用いない．❷ある場所に入るという意味ではを用い，enter into は今日では enter into business（実業界に入る）のように比喩的に「入る」という意味でのみ用いる．

—*DEWME*（s.v. enter, *v.*）

従える与格名詞句が「活動」そのものを直接的には指示しないものの，上記⑵における“enter into business”が「（実業界に入る）のように比喩的に『入る』」と解釈されている点で，2.2.⑵で見た *DEPL* の解釈と類似する一方，2.1.⑺で見た Yoneyama（2005）における“*enter* loses its inherent motional sense”のそれとは対極に位置する。本稿では，前者の立場，すなわち「英語 enter が本来的に持っている移動概念を［enter into NP］は部分的にでも継承している」という捉え方を優先する（詳しくは3.1.にて詳述）が，本稿冒頭で挙げた「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，なぜ enter を自動詞として用いる必要があるのか」また「その場合に，なぜ into という前置詞がその姿を現すのか」に関する意味生成

⒂　ここでの「本来他」は「本来他動詞である」ことを意味する。

のメカニズムについての記載が見当たらないのは2.2.で見た *DEPL* と同様である。

## 3．［Enter into NP］の意味概念生成プロセス

本論第一章（2 a-b）の問題をそれぞれ以下（1 a-b）として再掲する。

⑴　a．「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，なぜ enter を自動詞として用いる必要があるのか」また「その場合に，なぜ into という前置詞がその姿を現すのか」に関する意味生成のメカニズムについて

　　b．「上記 a から得られる認知メカニズムが他の英語表現にも適用され得るかどうか」に関する反証可能性および再現性について

上記（1 a-b）を解決し得る仮説の存在を3.1.で提示した後，それぞれの問題（およびそれらから生じるさらなる問題）を3.2.にて論考する。

### 3.1.　変換プロセスの仮説

2.1.では「目標領域としての抽象的事象を表現するには，通常（あくまでも直接的写像プロセスにおいて）その根源領域と見なされる具象的事象表示にも同様の統語構造が存在していなければならない」という言語事実を通時的観点も交えながら観察した。さらに，［enter NP］と［enter into NP］の概念的関係は厳密には［break NP］と［break through NP］のそれと等価ではないことも確認した。そして，2.1.(14 c）では，認知言語学的視座に立脚することにより，以下⑴の点が議論すべき問題として導き出

された。

⑴　SF, REL, D/A の各々の観点を通して現代英語 enter がロマンス諸語における同概念表示語とは異なる統語的振舞いを呈するようになったにせよ，その意味生成のメカニズムについては，具象的事象表示の［enter NP］を出発点として抽象的事象表示の［enter into NP］と直接的に比較・対照するのではなく，「古くは英語でも具象的事象表示に用いられていた［enter into NP］の移動概念が如何にそこに関っているのか」，また「現代英語に至っても，2.1.（10ａ）（＝Let's not *enter into details* at this state.）のような抽象的事象表示のときにだけ，なぜ［enter into NP］の形態が保たれているのか」という意味論的観点も通して論考されるべきである。

この議論を進めていく上で改めて留意しなければならないことは，2.1.⑺のように［enter NP］（具象的事象表示）と［enter into NP］（抽象的事象表示）とを一足飛びに比較・検討する必要性はない，ということである。つまり，enter を用いた抽象的事象表示は何も［enter into NP］の使用に限ることではなく，［enter NP］（抽象的事象表示）の位置づけも考慮しなければならない。そこで，まず，次の（２ａ-ｂ）を見てみよう。

⑵　ａ．Ludmilla: Today the Soviet Union has officially *entered* professional boxing？

—映画 *Rocky IV*（1985）〈00:08:58〉（イタリック筆者）

ｂ．Anne: An iron has *entered* my soul, Diana.

—映画 *Anne of Green Gables*（1985）〈01:01:32〉（イタリック筆者）

ここでは他動詞形としての［enter NP］が抽象的事象表示に用いられ，それぞれ“professional boxing”/“my soul”の指示物が抽象的場所として概念化されている⑯。しかしながら，このような［enter NP］によって表示される抽象的事象と2.1.(10ａ）によって表示されるそれとは同列に位置していない。つまり，［enter NP］によって表示される具象的事象が直接的に写像されている目標領域としての抽象的事象は，筆者には少なくとも，後者ではなく前者が担っていると感じられる。これは上出⑴で進められた論考と並行し，見方を変えれば，現代英語における［enter NP］（具象的事象表示）と［enter into NP］（抽象的事象表示）の概念的関係は，［enter NP］（具象的事象表示）と［enter NP］（抽象的事象表示）の概念的関係ほどは「近似性を持たない」，とも言い換えられる。英語動詞句［enter into NP］には［ENTER］という形態が用いられているのだから，enterそのものの語彙概念が部分的にでもそこに反映されているのは疑いようがない。しかし，その一方で，上記（２ａ-ｂ）のように［enter NP］（具象的事象表示）と直接的写像関係にあると捉えられた［enter NP］（抽象的事象表示）と比較した場合，その根源領域から［enter into NP］（抽象的事象表示）への意味論的距離，すなわち，プロトタイプ概念としての［ENTER NP］の source 表示から，派生義としての［ENTER INTO NP］の target 表示に至るまでの「距離」は「はるかに遠い」と考えざるを得ない。

以上の論点を下記⑶として簡潔にまとめる。

⑶　具象から抽象への単純な写像関係に基づくものであれば，［enter into NP］の形態も具象的事象表示に用いられないければならず，

⑯　本論3.1.(２ａ）における“professional boxing”はメトニミー（metonymy）表現であり，近接性（proximity）の関係に基づき，厳密には「組織」を指示している。したがって，その「内部への移動」が概念化されるという意味で「抽象的場所」として見なし得る。

事実，英語においても中英語期にはそれが通常の意味用法として見なされていた。それ故，SF, REL, D/A の各々の観点を通して具象的事象表示に至った［enter NP］の写像目標領域は同じ統語構造を有する上出（２ａ-ｂ）のような事例である。したがって，プロトタイプ概念としての［ENTER NP］の source 表示から，派生義としての［ENTER INTO NP］の target 表示に至るまでの「意味論上の距離」は，その直接的写像関係と比較して「はるかに遠い」と考えられる。

この「意味論上の距離」が「統語論上の距離」と如何に関連しているかをさらに深く見つめるために，もう一度，本論2.2.⑾―(12ａ-ｂ）（以下⑷―（５ａ-ｂ）として再掲）に目を向けてみよう。

⑷　Demo: And, normally I believe everybody needs to walk their own path, but just you're not walking yours.　Okay？　You're sitting near the path, on a rock.

―映画 *Failure to Launch*（2006）〈00:58:23〉

⑸　ａ．They love *walking the moors.*

―*OALD*（s.v. walk, *v.* 2）（イタリック筆者）

ｂ．Travis: Take the freight elevator to eighteenth floor, and you *walk the rest of the way.*

―映画 *The Negotiator*（1998）〈01:04:54〉（イタリック筆者）

Hopper and Thompson（1980）では，他動性は Participants（参加者），Kinesis（動作様態），Aspect（相），Puncluality（瞬間性），Volitionality（意図性；意志性），Affirmation（肯定），Mode（現実性），Agency（動

作主性），Affectedness of O（受影性），Individuation of O（対象の個体性）という10種類の意味特徴を有し，各々の特徴からその他動性の高低が算出され得ることが述べられている。このうち，Affectedness of O は被動作物に与えられる影響が「全体的か部分的か」に焦点を当てた捉え方であるが，たとえばこれを英語動詞 swim に当てはめた場合，次の（６ａ-ｄ）における容認度の差および意味概念の差が説明される。

⑹　ａ．Mary swam in the lake.
　　ｂ．Mary swam in the pond.
　　ｃ．Mary swam the lake.
　　ｄ．?? Mary swam the pond.

本来自動詞である swim を他動詞として用いた場合，被動作物への「受影性」が対格名詞句指示物「全体」に及び，いわゆる［＋ COMPLETE］のニュアンスが発生する。つまり，上記（６ａ）に対して（６ｃ）は「湖を泳ぎ切った」と解釈されることになる。これは，（６ａ）の自動詞用法では，「（泳ぐという）行為」と「（泳ぐための）場所」がプロファイル（PROFILE）される一方，「（泳ぐための）距離」はベース（BASE）として背景化されていることに起因している。他方，（６ｃ）では，参与者としては明示的にプロファイルされていないものの，そうしたベースは他動詞化された swim とそれに後続する（対格）名詞句との統語的距離の近さによる「影響力の強さ」でもって強く意識されることになる。したがって，（６ｃ）のように「～し切る」という動作の完了性が強調される場合，通常，その前提として対格名詞句指示物への動作遂行には［＋HARDSHIP］という前提が存在していなければならない。その結果，（６ｄ）では，そうした前提条件と pond の（典型的な）指示物に対する現実世界での認識との整合

性がとれず，不自然な表現と見なされることになる。事実，上出（５ｂ）では，対格名詞句に“the rest”が現れており，他動性としての［＋COMPLETE］のニュアンスが強化されている。

以上の意味論的捉え方を現代英語における［enter NP］と［enter into NP］の共時的関係に適用した場合，少なくとも下記（７ａ-ｂ）が得られることになる[17]。

⑺　ａ．［enter NP］：enter の影響が NP 指示物全体に及ぶ；影響力が強い[18]

ｂ．［enter into NP］：enter の影響が NP 指示物全体には及ばない；影響力が弱い

そして，ここに前出⑶の論考を重ね合わせると，以下（８ａ-ｃ）に示される変換プロセスの仮説の存在が浮かび上がることになる[19]。

---

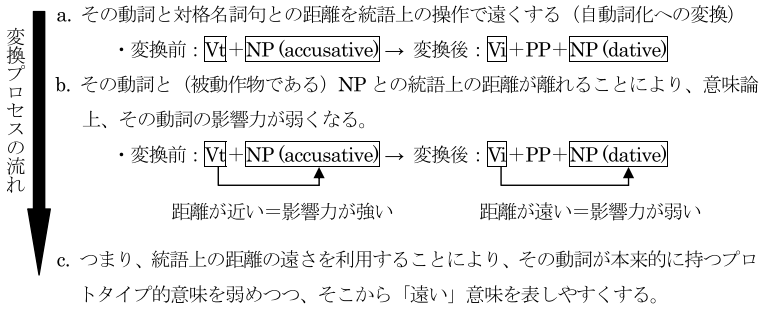
⑰　英語動詞 swim の場合と比較して，［enter NP］のプロトタイプ的意味は具象的事象表示，（現代英語における）［enter into NP］のそれは（その直接的写像関係にはない）抽象的事象表示という点で厳密には同列で語ることができない。しかしながら，統語論と意味論との接点上，対格名詞句指示物への「影響力」については同観点を適用し得る。では，なぜ，本論3.1.⑴の問題を解決するためにそのような観点に注目しなければならないかが議論となろうが，詳しくは本論で後述する。

⑱　ここでの「影響力が強い」は受動態に変形できるかどうかといった類のものではなく，あくまでも本論3.1.（７ａ-ｂ）に見られるような「対格名詞句と与格名詞句のいずれを従えるかによる『相対的』な影響力の差」に言及している。以下同様。

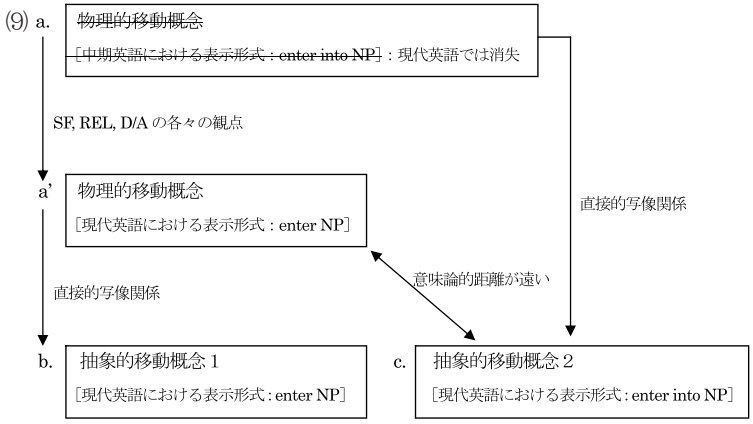
⑲　他方，現代英語 enter が本来的に持つ他動詞としての要素を優先した結果，共時的には一見，以下［１］に見られるような［enter oneself into NP］からの派生として考えられる余地があるように感じられるかもしれない。

［１］I was first introduced to the idea of competing in bodybuilding by a friend and training partner from the Czech Republic.　I went with him to help him out on his first competition and I enjoyed the day↗

⑻ （現代英語において）本来他動詞である英語動詞に関し，「プロトタイプ的意味から派生義に至るまでの意味論的距離が遠い」場合の変換プロセス：




したがって，通時的および認知言語学的視座における「具象から抽象への意味変化の流れ」に沿うと，下図⑼に描かれる概念拡張マップが得られる。




↘ and people I met so much I *entered myself into a competition* only a couple of months later.
—*USN, Interview Max O'connor, Former Mr England*（イタリック筆者）

英語動詞 enter の意味変化は上図⑼が示す概念変遷を辿ったと想定されるが，たとえその場合であっても，（９a′）と（９ｃ）との「意味論的距離」を考慮し，「なぜ（９ｂ）への直接的写像関係が（９ｃ）にも同じように適用されず，intoを残したままとなっているのか」という「統語論と意味論の接点上のミッシング・リンク」が依然として問題となるが，それを解決し得るのも上出⑻の仮説となる⒇。

そこで，この仮説の妥当性を探る上で，必然的に，次の（10ａ-ｄ）を吟味しなければならない。

⑽　ａ．「『統語上の距離の遠さ』が『影響力の弱さ』につながる認識上のプロセスとは如何なるものか」に関する考察

ｂ．「プロトタイプ的意味から派生義に至る意味変化プロセスの距離が遠い」といっても，「何をもってその派生義を『遠い』とするか」に関する考察

---

↘しかしながら，次の［２ａ-ｂ］に示されるような意味解釈の差に並行するが如く，これは“I entered a competition. . .”といった［enter NP］との意味論的な比較・検討をすべき種の問題であって，（本論1.⑴の意を示す）［enter　into NP］が生成される基底として見なすべきレベルにあるものではない（oneselfの概念的捉え方について詳しくは福森（2014）参照）。

［２］ａ．He drowned in the river.

ｂ．He drowned himself in the river.

なお，本論2.1.でも触れたように，英語enterの源流と同じくするロマンス諸語の同概念表示語は本来「非再帰動詞」であったこともこの論考の妥当性を物語っている。

⒇　本論2.1.⑼では，英語動詞enterについて「中英語期には自動詞としての用法がはるかに優勢であり（cf. *OED*（enter, *v.*）），かつ，現代英語では［enter NP］／［enter into NP］各々によって表示される意味概念が英語史上ほぼ同時期に出現している」ことを観察したが，そこにも記したように，具象的事象表示／抽象的事象表示の意味用法について各々の初出年は厳密にはわずかながらのずれがあり，本論3.1.⑼の流れと一致する。

c．「たとえこの仮説が成立するにしても，enterの場合，なぜ後続する前置詞がintoでなければならないのか」に関する考察

d．「この仮説が成立するのであれば，それが他の言語事例にも当てはまらなければならないのではないか」とする反証可能性および再現性に関する考察

上記（10 a - d）の諸問題については，3.2.に論を譲る。

### 3.2.　仮説の妥当性

#### 3.2.1.　変換プロセスを生じさせる比喩のフィルター

まず，3.1.(10 a）の問題に触れたい。以下⑴として再掲する。

⑴　「『統語上の距離の遠さ』が『影響力の弱さ』につながる認識上のプロセスとは如何なるものか」に関する考察

この点について，Lakoff and Johnson（1980）では，次の⑵のように記述されている。

⑵　If the meaning of form *A* affects the meaning of form *B*, then, the CLOSER form *A* is to form *B*, the STRONGER will be the EFFECT of the meaning of *A* on the meaning of *B*.

—Lakoff and Johnson（1980: 129）

たとえば，下記⑶に示されるように，否定辞 un- と否定語 not とでは，否定辞 un- の方が基体に「より近接している」ことから，「否定の力もより強い」ということになる。

⑶　Karl Zimmer（personal communication）has observed that the same principle governs differences like

Harry is not happy.

*versus*

Harry is unhappy.

The negative prefix *un-* is closer to the adjective *happy* than is the separate word *not.*　The negative has a stronger effect in *Harry is unhappy* than in *Harry is not happy.*　*Unhappy* means *sad,* while *not happy* is open to the interpretation of being neutral — neither happy nor sad, but in between.　This is typical of the difference between negatives and negative affixes, both in English and in other languages.

—Lakoff and Johnson（1980: 130）（下線筆者）

このような CLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECT（近接性は影響力の強さである）（cf. Lakoff and Johnson（1980: 128））とする認識フィルターの適用は語彙レベルに留まらない。たとえば，以下⑷—⑸に示されるように，文レベルにも適用されることは広く知られた事実である。

⑷　a．He taught Mary Latin.

　　b．He taught Latin to Mary.

⑸　a．Tom found the sofa comfortable.

　　b．Tom found the sofa to be comfortable.

　　c．Tom found that the sofa was comfortable.

上記（４ a - b）においては taught とその PATIENT／GOAL としての項

役割を果たすMaryとの統語上の距離の違いにより，前者が「メアリーは教わったことを実際に身につけた」事象を示す一方，後者は「メアリーが実際にラテン語を身につけたかどうかには言及していない」ことになる。他方，（5 a - c）においてはfoundとそのTHEMEとしての項役割を果たす the sofa との統語上の距離の違いにより，aからcへの移り変わりに沿ってAGENTの直接体験から間接体験に移行することになる。

これらの事実が示唆することは，次の⑹―⑺である。

⑹　第一に，そうした認識は日常生活における我々の身体経験（たとえば人間関係であれば，物理的に近い距離にいる人には影響を強く与えやすい等）から生じているという現象学的視点によっても支えられているということ

⑺　第二に，そうした身体性が反映されることによって，語彙そのものには本来的に含まれていない解釈（⑷では教えた結果身につけたかどうか，⑸では直接的に経験したかどうか等）が生じており，構文変化によって構成性の原理（Principle of Compositionality）の枠組みを越え，各語句の文字通りの意味が総和される以上のゲシュタルト的意味が生じていること

見方を変えれば，これは，動詞と被動作物表示名詞句との「遠／近」に関る統語上の操作を行うことによって，新たな「意味変化」とも言うべき解釈をその動詞句に生じさせている，とも捉えられる。このようなメタファー的観点を［enter NP ― enter into NP］の共時的関係に導入すると，被動作物への「直接的影響」を与えることができる形式は前者であり，「非直接的影響」を与えることができる形式が後者となる。したがって，

⑻　Enter のプロトタイプ的概念を部分的にでも継承しつつ，意味論的にそこから「離れた」派生義の概念を持たせるには，enter を自動詞として用い，被動作物表示名詞句との「距離を離す」という統語上の操作が必要になる，

と想定される[21]。なお，このことは，2.1.⑺における Yoneyama（2005）の問題提起とも何ら矛盾を起こしていない。そこでは，SF, REL, D/A の各々の観点を通して，「物理的移動」表示になぜ英語 enter がロマンス諸語における同概念表示語とは異なる統語的振舞いを呈するかが見つめられていた。これは，視点を変えれば，「抽象的事象」表示に用いられる［enetr into NP］の into は，現代英語では単なる移動経路表示だけに用いられているのではないことを意味する。

### 3.2.2.　派生義を「遠い」とする意味論的基準

次に，3.1.（10ｂ）の問題を議論する。以下⑴として再掲する。

⑴　「プロトタイプ的意味から派生義に至る意味変化プロセスの距離が遠い」といっても，「何をもってその派生義を『遠い』とするか」に関する考察

たとえば，3.1.⑷（以下⑵として再掲）で見た“walk”も抽象的歩行移動を表しているという点ではすでに派生義であり，如何なる基準でもって「プロトタイプ的意味とその派生義との意味変化の距離を『遠い』とする

---

[21]　本論3.2.1.⑻において，中英語期に具象的事象表示に［enter into NP］の形態で用いられていた事実を踏まえると，通時的観点からは，厳密には「持たせるには」ではなく「保持するには」が妥当。

か」については，一見，主観によるところが大きいようにも感じられる。

⑵　Demo: And, normally I believe everybody needs to walk their own path, but just you're not walking yours.　Okay？　You're sitting near the path, on a rock.

—映画 *Failure to Launch*（2006）〈00:58:23〉

さらに，英語動詞 walk に限らず，物理的動作／状態を表示する動詞の多くは抽象世界における同動作／同状態を表現するためにも用いられ，そうした「遠／近」を分かつ意味論的基準を明確に設定するのが難しいようにも感じられる。

しかしながら，筆者には，上記⑵で見られるような抽象的動作を示す［walk NP］と，同じく抽象的動作を示す［enter into NP］とは，少なくとも同列に位置しているようには感じられない。事実，3.1.（２ａ-ｂ）（以下，それぞれ（３ａ-ｂ）として再掲）で観察したように，物理的動作を示す［enter NP］からの直接的写像関係にある目標領域表示には，通常，同じ統語構造が適用される。（３ｃ）についても同様である。

⑶　ａ．Ludmilla: Today the Soviet Union has officially *entered* professional boxing？

—映画 *Rocky IV*（1985）〈00:08:58〉（イタリック筆者）

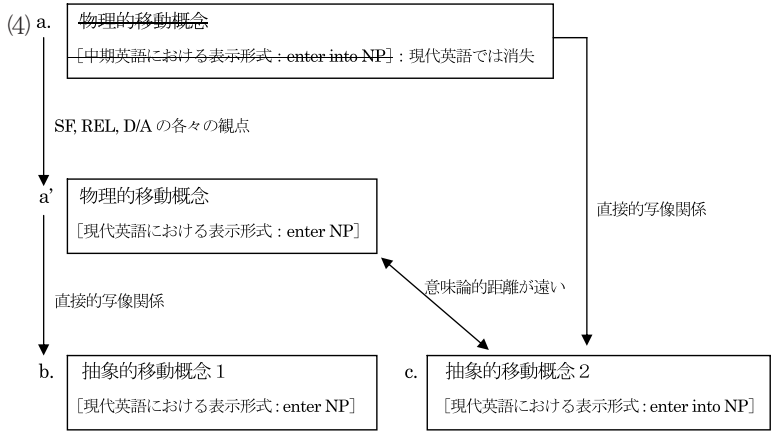
ｂ．Anne: An iron has *entered* my soul, Diana.

—映画 *Anne of Green Gables*〈01:01:32〉（1985）（イタリック筆者）

ｃ．Marquis: It would be ten years before another man would *enter* her life, a man who was still a boy in many, many ways.

―映画 *Ever After*（1998）〈00:11:26〉（イタリック筆者）

ということは，「物理的移動」を表示する他動詞句［enter NP］の直接的な概念写像は，あくまでも「抽象的移動」を表示する他動詞句としての［enter NP］でなければならず，この点において，「抽象的事象」を表示する自動詞句［enter into NP］の概念は，「物理的移動」を表示する［enter NP］からの単なる直接的写像関係だけでは説明できない[22]。これは，3.1.⑼（以下，⑷として再掲）の通時的視座を交えた見解においても同様であり，（４a′）と（４ｃ）との「意味論的距離の遠さ」が依然として存在している事実は何も変わらない。




[22] *DELP*（s.v. enter, *v.*）における第三項の notes の内容に基づくと，以下［１a - b］において，通常，前者は「（すでに始まっている）活動の中に入る」と解釈される一方，後者は「今から活動し始める」と捉えられる。

［１］ａ．She entered the cake-making competition.
　　ｂ．She entered into the cake-making competition.

共時的には，この時点ですでに［enter into NP］は他動詞形［enter NP］の概念と比較して「意味変化」を起こしていると言えるが，そうしたプロトタイプ↗

言葉を変えれば，［walk NP］における「具象–抽象」の事象表示は，［enter NP］における「具象–抽象」のそれと共に語られるべきであって，現代英語では主に抽象的事象表示にしか用いられない［enter into NP］はその枠組みから外れる，と考えなければ論理に合わない。

では，ここで，何でもって「プロトタイプ的意味とその派生義との意味変化の距離を『遠い』とするか」という問題に遡ってしまうが，その主たる判断基準の一つに「品詞の転換」が挙げられる。下記（5 a - b）を見てみよう。

⑸　a．1　a door, gate, passage, etc. used for entering a room, building or place

2　the act of entering a room, building or place, especially in a way that attracts the attention of other people

—*OALD*（s.v. entrance, *n.*）

b．1　an act of going into or getting into a place

2　the right or opportunity to enter a place

3　the right or opportunity to take part in sth or become a member of a group

—*OALD*（s.v. entry, *n.*）

上記（5 a - b）は各々entrance, entry という enter の名詞形の意味用法に関して *OALD* に記載されている定義であるが，いずれも現代英語におけ

↘的意味から「離れた」派生義が表される背景には，［1 a］に見られるような「『（単に）既存の活動の中に抽象的に入る』という意からの影響力を弱めている（つまり，その意とは「離れた」派生義を生じさせている）」という認識が存在しているという点で，依然として本論3.1.⑻の捉え方が生きている。さらなる詳細については本論3.2.3.2.にて論述。

る他動詞　enter　の主たる概念を直接的に受け継いでいる一方，本論1.(1)（以下⑹として再掲）に記されるような［enter into NP］の概念を直接的に継承しているものではない[23]。

⑹　1　to begin to discuss or deal with sth
　　2　to take an active part in sth
　　3　[no passive] to form part of sth or have an influence on sth
—*OALD*（s.v. enter into sth）

如何なる英語動詞も名詞化した場合，通常，必然的にそのコアとなる概念を直接的に継承することは言を俟たない。逆成（BACK-FORMATION）についても同様である。しかしながら，現代英語において，上記（５ａ-ｂ）と［enter　NP］の概念的関係を，同じく上記（５ａ-ｂ）と［enter　into NP］のそれと比較した場合，明らかに後者の方が意味論的にそのつながりが「遠い」と言える。したがって，他動詞を基にしたこのようなケースの共時的区別には「品詞の転換」が役立ち，意味変化距離の「遠／近」を判断するための一基準になり得ると考えられる[24]。

---

⑵③　本論3.1.でも述べたように，英語動詞句［enter into NP］は［ENTER］という形態が用いられているのだから，enter　そのものの語彙概念が部分的にでもそこに反映されていることは疑いようがない。その点では2.2.—2.3.各々で観察した先行研究の見解と本稿のそれは並行する。しかしながら，本節でも述べているように，現代英語では主に「抽象的事象」を表示する［enter into NP］の概念は，「物理的移動」を表示する［enter　NP］からの単なる直接的写像関係だけでは説明できない。したがって，ここでは「直接的かどうか」を問い，概念的な「遠／近」の差を議論している。なお，本論3.2.2(５ａ-ｂ）は *OALD* の記載の一部であるが，それ以降の定義でも3.2.2.⑹に示される概念（特に“to begin to discuss or deal with sth”）に相当するようなものは見当たらなかった。

⑵④　この判断基準が必要十分条件を満たすかどうかを確認するには，他の同様の英語表現にも当てはまるかどうかを検証する「再現性」についても注視しなければならない。これらの点については本論3.2.4.に論を譲る。

### 3.2.3.　自動詞変換プロセスに伴う前置詞の出現法則

#### 3.2.3.1.　内包概念の言語化のプロセス

ここでは，3.1.(10 c ）の問題に目を向ける。以下⑴として再掲する。

⑴「たとえこの仮説が成立するにしても，enter の場合，なぜ後続する前置詞が into でなければならないのか」に関する考察

そこで，まず，次の⑵に着目する。

⑵
$$\begin{bmatrix} \text{enter} \\ \text{V} \\ \underline{\quad\quad}\ \langle \text{NP}_j \rangle \\ [_{\text{Event}}\ \text{GO}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_i,\ [_{\text{Path}}\ \text{TO}\ ([_{\text{Place}}\ \text{IN}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_j)\ ]\ )\ )\ ] \end{bmatrix}$$

—Jackendoff（1990: 46）

上記⑴は英語動詞 enter に関する語彙概念構造を示している。そして，この概念構造には，「到達点」概念表示（ここでは「経路」表示）の TO と「三次元空間内部における位置」概念表示（ここでは「移動後の位置」表示）の IN が包含されていることが観察される。この概念構造に沿うと，現代英語 enter はいわゆる INTO の概念を本来的に内包していることから，［enter into NP］は，共時的には，他動詞 enter そのものから PATH および PLACE の概念を抜き出すことによって，into がその姿を現したと考えられる㉕。以上のことを下記⑶として簡潔に図示する㉖。

㉕　いわゆる「意味の余剰性（redundancy）」から算出されたスキーマであるが，同様の捉え方は（動詞から）名詞に品詞転換した場合にも当てはまる。以下［1］がその実例である。↗

(3)　$[_{\text{Event}}\ \text{GO}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_i,\ [_{\text{Path}}\ \text{TO}\ ([_{\text{Place}}\ \text{IN}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_j)\ ])\ ])\ ]$　　into

言語化

なお，上図(3)はあくまでも上出(2)における Jackendoff（1990: 46）の「共時的」捉え方から算出されたものであり，厳密には，3.2.2.(4)に基づく通時的視座とは見解を異にする。なぜなら，2.1.(８ａ）で見られたように，古くは英語でも具象的事象表示に［enter into NP］の形態が用いられており，現代英語における［enter into NP］の形態はその統語関係が変わることなく受け継がれた，いわゆる「名残」に当たるとも考えられるからである。しかしながら，その場合であっても，SF, REL, D/A の各々の観点を通して現代英語では「物理的移動」表示（＝3.2.2.(４a′)）および（その直接的写像関係に当たる）「抽象的移動」表示（＝3.2.2.(４ｂ)）に［enter NP］の形態が適用されるようになったにも拘らず，なぜ2.1.(10a)（＝Let's not *enter into details* at this state.）のような抽象的事象表示（＝3.2.2.(４ｃ)）には同形態が適用されず，依然として into を保持しなければならないのかという問題に遡る。この点について，通時的視座からは，厳密には（Jackendoff（1990: 46）の共時的捉え方を通して算出された）上記(3)のような「［INTO］概念の言語化」とは言えないまでも，3.1.(８ｃ）で見

↘　［１］Stu Nahan: Tommy Gunn has been said to be such *a student of* Rocky Balboa's style he's been nicknamed by the press the "Clone Ranger."
—映画 *Rocky V*（1990）〈01:18:58〉（イタリック筆者）
上記［１］では，英語動詞 study を student と名詞変換することにより，"of" として対格概念が抽出・言語化されている。これは，必然的に，名詞形 student には対格概念が包含されていないことを意味している。同様の手法が本論3.2.3.1.(3)にも適用されており，［enter into NP］の enter に［INTO］の概念が包含されているのであれば，その直後に後続する前置詞 into との関係により「意味の余剰」になってしまう。

(26)　同様のケースにおける他の英語動詞によっては PATH しか具現化しない場合も存在している。詳しくは本論3.2.4.にて論述。

た「統語上の距離の遠さを利用することにより，その動詞が本来的に持つプロトタイプ的意味を弱めつつ，そこから『遠い』意味を表しやすくする」というプロセスの捉え方が依然として生きていることに何ら変わりはない。

以上の捉え方は，歴史言語学的観点とも矛盾を引き起こさない。2.1.⑵—⑶でも見たように，英語 enter の起源が種々のロマンス諸語における同概念表示語と共にし，「物理的移動」を表示するそれらの動詞が具象的場所表示名詞句を従える場合，統語上，前置詞を伴って与格名詞句として扱わなければならない。このことは，それらの動詞自体には英語でいう［INTO］の概念が含まれていないことを意味する。したがって，現代英語 enter が他動詞として用いられた場合に包含されている［INTO］の概念が，ここでの「抽象的事象」表示に移行する場合に［enter into NP］としてその姿を現すことは，むしろ，ロマンス諸語において英語 enter と同じ起源を持つ動詞句が提示する同様の振る舞いに戻す（もしくは中英語期における同様の振る舞いを残した）だけであり，その統語上の操作を行う上でも障壁が少ないと考えられる。

#### 3.2.3.2.　内包概念の言語化に伴う図地分化

あくまでも共時的な観点から本論3.2.3.1.⑶（以下⑴として再掲）を振り返った場合，「では，ここでの enter は如何なる概念表示となるのか，残された EVENT からして英語動詞 go と同義になるのか」が議論となろうが，これはあくまでも語彙概念構造内における EVENT 表記として便宜上［GO］が用いられているだけであって，英語動詞 go と同義になることを意味していない。

(1)　$[_{\text{Event}}\ \text{GO}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_i,\ [_{\text{Path}}\ \text{TO}\ ([_{\text{Place}}\ \text{IN}\ ([_{\text{Thing}}\ \ ]_j)\ ]\ )\ ]\ )\ ]$　　into

言語化

その主たる理由として，以下（２ａ-ｂ）が挙げられる。

⑵　ａ．まず，enter が直自性（deixis）を持たないこと。

ｂ．次に，enter の源流と同じくするロマンス諸語の同概念表示語が英語でいう［INTO］の概念を包含していない事実を鑑みても，（共時的視点から）上記⑴のように内包概念が取り出されたからといって，EVENT として取り残された［GO］が本来的に enter と同義にはなり得ないこと。

前者（２ａ）については，下記（３ａ-ｂ）の容認度から確認される。

⑶　ａ．*He *went* into the room where I was studying.

ｂ．He *entered* the room where I was studying.

他方，後者（２ｂ）について，まずは，次の⑷―⑸のルーマニア語表現を見てみよう。

⑷　ａ．El　s-a dus　în　cameră.

He　went　into　the room

ｂ．*El　s-a　dus　cameră.

⑸　ａ．El　a intrat　în　cameră.

He　entered　into　the room

ｂ．*El　a　intrat　cameră.

各々英語動詞 go/enter の概念表示に相当する duce/intra 共に名詞句を従える場合，［INTO］の概念表示に相当する“în”を後続させなければなら

ず，いずれも同じ統語的振舞いを呈している（前者については2.1.⑶にて既述）。ここから，duce/intraには［INTO］の概念が包含されていないことが見出される。そして，この⑷―⑸各々の意味論的差異についてルーマニア語母語話者に調査したところ，次の⑹の主旨に基づく回答が得られた[27]。

⑹　後者（＝（５ａ））は壁などの物理的な囲いのある三次元空間内部にドアや門を通って移動する感じがする。他方，前者（＝（４ａ））は必ずしもそのような制限を必要としない。事実，「森の中に入る」を言いたいときは，特殊な状況でない限り，通常，intra în の使用は不自然である[28]。

ここから類推されることは，［duce în NP］が用いられるときは「存在のメタファー（ONTOLOGICAL metaphor）」を通して（実際の物理的な囲いがなくとも）構造化された心理的三次元空間を設定し，その内部に移動する場合にも用いられる，ということである。他方，［intra în NP］は，上記⑹で述べられているように，そのプロトタイプ的意味が成立するための前提として「物理的な囲い」を伴う場所のみを landmark として要求する

⑵⑺　計20回に渡る筆者の招待講演会（於ルーマニア国）およびそれらに関る欧州学術交流会（2010年―2014年）にて行われた言語文化調査結果の一部である。同招待講演会は，『言語と科学（*Language and Science*）』，『国際理解教育（*Education for International Understanding*）』，『交換留学制度を通した教育的戦略（*Pedagogic Strategy through Exchange-Students System*）』，『社会発展に寄与する言語教育の役割：認知科学を通した ESP の効果的指導法（*A Role of Language Education to the Development of the Society: An Effective Teaching Method of ESP through Cognitive Science*）』といったテーマを中心に，同国の文部省や高等教育機関，諸学術協会（Romani-Japan Association of Education and Science など）からの依頼に基づく。2014年２月には同国 UNESCO 本部での招待講演会も実施された。詳しくは近畿大学法学部　HP（http://www.kindai.ac.jp/law/staff/profile/moriyama.html）（アクセス日：2014年11月15日）参照。

⑵⑻　ここで言う「特殊な状況」とは本論3.2.3.2.（７ａ-ｂ）に見られる論考に準ずる。

と考えられる。つまり，たとえ上記⑷―⑸が現実的には同一事象を指示した場合でも，言語認識の世界では，後者が扉などの入口を意識した物理的移動であり，前者は必ずしもその限りではない，という相違が存在していることになる。同様のことが英語動詞 enter のプロトタイプ的意味にも適用され，たとえ“enter the forest”など明確な物理的境界を持たない場所表示名詞句と共起する場合であっても，その指示物には「認識上の囲い」（それも“go into the forest”のときよりもしっかりとした囲い）を設け，通常，（trajector としての主体が存在する場所とは）「別種の（閉鎖）空間」として見なされることになる。下記（７ａ-ｂ）がその顕著な実例であり，各々，斜体部分がこの論考の妥当性を物語っている。

⑺　ａ．Ivy Walker: Is anyone there？　I come from a village where we think it's 1886.　*I've broken our taboo about entering the forest to find medicine for my fiancee.* Hello？

― TV ドラマ *Robot Chicken*（2005），Episode: Vegetable Fun Fest（2005）（イタリック筆者）

ｂ．Udonna: When the five of you *entered* the *forest, you stepped into a magical dimension.*

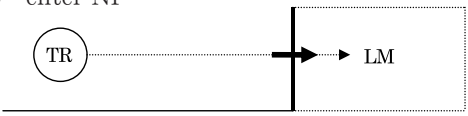
― TV ドラマ *Power Rangers Mystic Force*（2006），Episode: Broken Spell: Part 1（2006）（イタリック筆者）

しかしながら，上出⑷―⑸との統語上の差を鑑みると，特に注意しなければならないことは「同事象を表示するに当たって現代英語 enter には into を後続させる必要がない」ということである。つまり，共時的見地に立脚すると，3.2.3.1.⑵で［INTO］の概念が内包されていると想定したとして

も，［enter into NP］という別の形態も存在し，かつ，［INTO］の概念が言語化されていない以上，landmark の指示物は言語認識の中では三次元空間として相対的に前景化（FIGURE）されていない，すなわち「入り口部分のみが前景化」され，その外部から内部への trajector の位置変化だけに焦点が当たっていると言える[29]。この事実を如実に物語る実例が上記（7 a - b）であり，ここに「異なる空間の境界」認識が生じることになる。

以上の図地分化（FIGURE/GROUND SEGREGATION）を以下⑻のイメージ・スキーマ（image-schema）として簡潔に示す[30]。

⑻　enter NP[31]




言葉を変えれば，［go into NP］とは異なり，「異なる空間の境界」認識としての「入り口」を前景化させるには，それ相応の理由が存在していなけ

⑵⑼　なお，ここで用いられている「前景化（FIGURE）／背景化（GROUND）」は単に焦点化に関る認識に言及しているだけであって，それぞれ（プロファイルされた参与者のうち各々前景化されたモノ／背景化されたモノとして見なされる）trajector/landmark との対応関係で用いているわけではない。以下同様。

⑶⓪　名詞化した entrance が「入り口」のみを指示し，（その入り口を含む）三次元空間全体を表さないことも，本論3.2.3.2.⑻の存在を裏付ける論拠の一つとなる。なお，当図における landmark の図地分化の点で，以下［1］に示される松本（1997）の見解とは異にする。

［1］enter

―松本（1997: 198）

⑶⓫　TR/LM はそれぞれ，trajector/landmark（プロファイルされた参与者の関係上，前者が「前景化されたモノ」，後者が「背景化されたモノ」）を指す。以下同様。

ればならない[32]。特に，物理的囲いを有していない抽象的空間にわざわざ「境界としていの入り口」を設けるのであれば，なおさらのことである。言うまでもなく，「入り口」とは「そこから中へ入ってゆく所」（*MJJD*（s. v. いり・ぐち【入り口】））である。そして，我々の日常経験を振り返った場合，「入り口」を設けることによってそこを通過することができる人々を「制限」することが可能となる。こうした日常経験から得られる「制限」認識が基盤となって，3.2.2.（３ａ）および（３ｃ）（以下，それぞれ（９ａ-ｂ）として再掲）における［enter NP］の主体には［＋permissive］の概念が，3.2.2.（３ｂ）（以下，（９ｃ）として再掲）における［enter NP］のそれには［＋special］の概念が付与されることになる。

⑼　ａ．Ludmilla: Today the Soviet Union has officially *entered* professional boxing.

—映画 *Rocky IV*（1985）〈00:08:58〉（イタリック筆者）

ｂ．Marquis: It would be ten years before another man would enter her life, a man who was still a boy in many, many ways.

—映画 *Ever After*（1998）〈00:11:26〉（イタリック筆者）

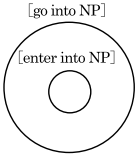
ｃ．Anne: An iron has entered my soul, Diana.

—映画 *Anne of Greengables*（1985）〈01:01:32〉（イタリック筆者）

---

⑶2　したがって，［go into NP］と［enter into NP］との意味論上の概念的関係は，本論2.1.⑴9で観察されたような並列関係ではなく，以下［１］に示されるような包含関係で捉えられ得る。

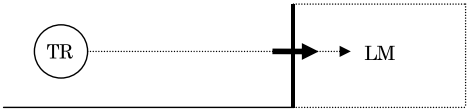
［１］



このイメージ・スキーマがさらに意味することは，「物理的場所／抽象的場所において想定される各々の『入り口』の設置箇所は，認識上，互いに必ずしも同一のポジションをとるとは限らない」ということである。言うまでもなく，物理的三次元空間（たとえば「部屋」など）における入り口はその空間が始まる箇所に設置されるのが通常であり，たとえば空間内中央部に設置するようなことは考えられない。このような背景知識の枠組み（FRAME）に対し，抽象的三次元空間（たとえば「議論」など）は物理的囲い（たとえば「壁」など）を持たない特性を有するが故に，「その活動空間に入った（＝加わった）時点」が当事者にとっての「入り口」として自由に設定し得る[33]。したがって，たとえば“enter the conversation”であれば，上出⑻とは異なり，文脈によって次の（10 a - b）のイメージ・スキーマに示される二通りの解釈が設定可能となり，「既存の会話（の輪）に加わる」（cf. *DELP*（s.v. enter, *v.*））という意味が生じるのも合点がいく[34]。

⑽　enter NP［抽象的三次元空間］

a．「会話の始点から入る」場合：




---

[33]　活動が「空間」として概念化される背景には，「容器－内容物」の認識に基づいた「存在のメタファー（ONTOLOGICAL metaphor）」が機能している（cf. Lakoff and Johnson（1980: 32））。

[34]　“enter the conversation”が「既存の会話（の輪）に加わる」と解釈される点について，*DELP*（s.v. enter, *v.*）ではあくまでも「頻度」の問題として扱われている。つまり，文脈によっては必ずしもそれだけが表されるわけではないことがここに含意されているが，そのような頻度の差が生じる理由としては，本論で後述する［enter into NP］が「入り口の固定化」認識を通した「始点志向」表現であり，意味競合の結果によることも想定される。

b.「会話の途中から入る」場合：

それに対し，［enter into NP］の場合，共時的には前出⑴のメカニズムに基づいて［INTO］概念が明確に言語化されているのだから，その概念表示による「移動経路」および「到達空間」も背景化（GROUND）の範疇から抜け出すことになる。この図地分化を下図⑾のイメージ・スキーマとして簡潔に示す。

⑾　enter into NP

前出⑽の論考との概念的差異を語る上で見逃せない点は，ここで浮かび上がった「移動経路」および「到達空間」の存在である。⑽では，「入り口部分のみが前景化」され，その外部から内部への trajector の位置変化だけに焦点が当たっているが故に，物理的囲いを持たない抽象的活動空間の特性もここに相まって，当事者の活動の入り口を自由に設定することが可能であった。しかしながら，上図⑾では，trajectorの「移動経路」および「到達空間」も本来的に発話者／書き手の視野に入っている。「移動経路」の背後には「起点」と「終（着）点」が存在していることは言うまでもない。これは，各々「出発点」／「到達点」とも言い換えられる。つまり，厳密には「到達」概念をも包含する「移動経路」概念表示語 into が言語化（すなわち明示化）されている限り，抽象的「到達目標空間」としての意味役割がその与格名詞句に与えられていると考えなければ論理に合わない。

あくまでも移動事象の前提として，そもそも与格名詞句の指示物が抽象的「到達目標空間」として明確に「三次元空間化」される概念化がすでに観察者の視野に入っているのであれば，たとえそれが物理的囲いを持っていなくとも，通常，その入り口たる活動始点は［+fixable］でなければならない。この認識上の論理が，たとえば“enter into conversation”に「会話を始める」（cf. *DELP*（s.v. enter, *v.*））といった解釈を与えることにつながると考えられるのである[35]。

### 3.2.4.　反証可能性および再現性

最後に，3.1.(10ｄ）の問題に踏み込む。以下⑴として再掲する。

⑴「この仮説が成立するのであれば，それが他の言語事例にも当てはまらなければならないのではないか」とする反証可能性および再現性に関する考察

これまで，実際の学習者の声をもとに本稿冒頭で挙げた（２ａ）の問題（以下⑵として再掲）を明らかにするために，

⑵「（プロトタイプ的意味とは）異なる意味を表すために，なぜenterを自動詞として用いる必要があるのか」また「その場合に，なぜintoという前置詞がその姿を現すのか」に関する意味生成のメカニズムについて，

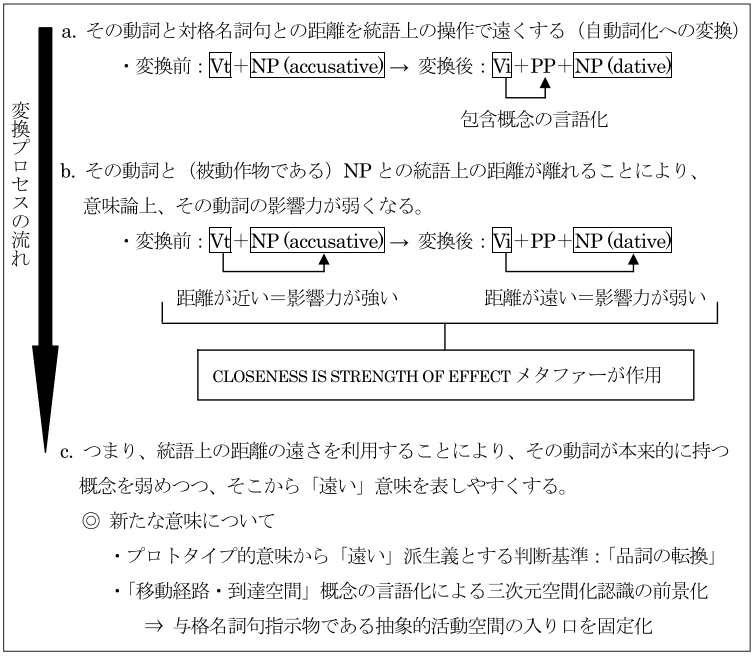
---

㉟　したがって，英語では，古くは具象的事象を表示した［enter into NP］の形態が現在の［enter NP］となったが故に，抽象的事象表示としての「意味論的距離」に応じて，その直接的写像関係／非直接的写像関係各々に当たる［enter NP］/［enter into NP］という形態上の使い分けが可能になったと考えられる。

3.1.では，（現代英語で）本来他動詞である英語動詞において「プロトタイプ的意味から派生義に至る意味変化プロセスの距離が遠い」場合における変換プロセスの仮説を提示し，3.2.1.ではそのプロセスを生じさせる比喩のフィルターを，3.2.2.では派生義を「遠い」とする判断基準を，そして，3.2.3.では内包概念が前置詞として言語化される共時的なスキーマを観察した。

以上の論考を3.1.の仮説に組み込むと，次の⑶の認知メカニズムが導き出される。

⑶　（現代英語において）本来他動詞である英語動詞に関し，「プロトタイプ的意味から派生義に至るまでの意味論的距離が遠い」場合の変換プロセス：



上出⑴で述べたように，共時的に見たとはいえ，この認知メカニズムが英語母語話者の無意識的意識に実在しているのであれば，英語動詞（句）［enter NP ― enter into NP］の関係に留まるだけではないはずである[36]。つまり，他の英語表現にも適用され得るかどうかを検証することにより，その反証可能性および再現性を見つめることも認知科学研究の論考を進める上で重要となる。

そこで，次に，下記⑷に注目する。

⑷　to come near to sb/sth in distance or time

―*OALD*（s.v. approach, *v.* 1）

上記⑶はいわゆる「～に近づく；接近する」という日本語訳が宛がわれることが多い英語動詞approachの第一義である[37]。そして，次の（５ａ-ｂ）にも見られるように，英語動詞approachが「（具象事物を表示するlandmark

---

[36]　繰り返し述べるが，本論2.1.（８ａ）で見たように，古くは英語でも具象的事象表示に［enter into NP］の形態が用いられており，現代英語における［enter into NP］の形態はその統語関係が変わることなく受け継がれた，いわゆる「名残」に当たるとも考えられる。この点で，たとえ他の英語表現が以下［１］と同じような関係を持っていたとしても，このような歴史的変遷を有していなければ純粋な比較対象にならないかもしれない。

［１］［*Vt*＋NP ― *Vi*＋preposition＋NP］
（*Vt* / *Vi* はそれぞれ（主に移動事象表示に関る）「他動詞」／「自動詞」を示し，前者が現代英語における本来的な意味用法，後者が主に抽象的事象を表す場合に限る）

しかしながら，本論3.2.4.⑶が部分的に共時的に捉えたプロセス図であるといっても，プロトタイプ的意味から意味論的に（品詞転換によって判断される）「離れた」派生義を示すために「なぜ［*Vi*＋preposition＋NP］の形態を用いなければならないのか」という命題を満たし得る点では，その反証可能性および再現性を見つめる上での障害にはならないと考えられる。

[37]　英語史上，approachの動詞用法の初出が1260年頃，他方，名詞用法のそれが1460年以前である（cf. *OED*（s.v. approach））。

への）物理的移動」を表示する場合，「他動詞」として用いられるのが典型的である。

⑸　ａ．McNeilly: Mr. Harison, *approach* the bench.

—映画 *I Am Sam*（2001）〈01:04:04〉（イタリック筆者）

ｂ．Maynard: Take your foot off the nigger, put your hand behind your head, *approach* the counter.

—映画 *Pulp Fiction*（1994）〈01:36:39〉（イタリック筆者）

また，下記（６ａ-ｂ）に示されるように，「（抽象事物を表示する landmark への）抽象的移動」を表示する場合も同様である[38]。

⑹　ａ．Zack: Still an observation so vague as to *approach* meaninglessness.

— TV ドラマ *Bones*（2005），Episode: The Parts in theSum of the Whole（2010）（イタリック筆者）

ｂ．Skip: You gotta *approach* every day as if it's your last !

—映画 *Lords of Dogtown*（2005）〈00:17:17〉（イタリック筆者）

他方，次の⑺—⑻における approach も「抽象的事象」表示に用いられているが，その意味論的様相は上記（６ａ-ｂ）と異なる。

---

⑶⑻　以下［１］に示されるように，たとえ具象的移動か抽象的移動かの揺れが生じている場合であっても，依然として，他動詞の形態で用いられる。

［１］Connie: Tell them that the horizon is an imaginary line that recedes as you *approach* it.

—映画 *Mona Lisa Smile*（2003）〈00:42:24〉（イタリック筆者）

⑺　Her reply *approaches to* an absolute denial.

—*GEJD*（s.v. approach *vi.* 2）

⑻　a．temperatures *approaching* 35℃

b．He's never had anything *approaching* a normal life.

—*LDCE*（s.v. approach, *v.* 5）

ここでの approach は日本語訳でいう「ほぼ等しい；近似している；匹敵している」という抽象的事象を表示しているが，以下（９ａ）に記されるように，*LDCE* では「自動詞」•「他動詞」いずれの形でも用いられると規定されている。他方，次の（９ｂ）に示されるように，*GEJD* では「自動詞」の項目にしか同意味用法は掲載されていない。

⑼　a．［intransitive and transitive］to be almost equal to something

—*LDCE*（s.v. approach, *v.* 5）

b．［…に］近いものとなる，近似する［*to*］

—*GEJD*（s.v. approach, *vi.* 2）

前出⑶の変換プロセスに従うと，これが意味することは，プロトタイプ的意味からの変化距離が通常の派生義（e.g. to begin to deal with a situation or problem in a particular way or with a particular attitude（*LDCE*（s.v. approach, *v.* 4））よりは概念的に「遠い」が，［enter NP — enter into NP］のような関係ほど遠くはない，それ故，「自動詞／他動詞いずれの形を用いるべきか」という揺れが生じていると考えられることである[39]。

---

[39] “to begin to deal with a situation or problem in a particular way or with a particular attitude”の意を示す approach を「通常の派生義」と見なし得る論拠も，本論3.2.4.⑶の変換プロセスに基づく。事実，動詞 approach を名詞形↗

事実，名詞への品詞転換を行ったapproachについて，*OALD*では上記（９ａ-ｂ）に準ずる意味用法として“a thing that is like sth else that is mentioned”（s.v. approach, *n.* 6）と記載されている一方，*LDCE*ではこれに準ずる意味用法の定義は見当たらない。

さらに，approach に前出⑶の変換プロセスが適用され得るのかどうかを通時的観点からも確認してみよう。まず，次の⑽に示されるように，enter と同じく，approach もその起源はロマンス語に遡る。

⑽　◆ME *ap(p)rentis, -ice, -esse* ▭ ML *apprehensīvus*（F *apprehensive*/It. *apprensivo*）
←*L apprehensus*（p.p.）← *apprehendere*
―*KDEE*（s.v. approach）

そして，下記⑾のルーマニア語語実例に代表されるように，ロマンス諸語において英語 approach と同様の概念を表示する動詞は，その物理的移動先を表示する名詞句を従える場合，通常，前置詞を後続させなければならない。

⑾　El　s-a　apropiat　　de　magazim.
He　approached himself　of　the supermarket

---

↘へと品詞転換した場合，辞書では以下［１］の定義が確認される。
［１］a method of doing something or dealing with a problem
―*LDCE*（s.v. approach, *n.* 1）
したがって，“to begin to deal with a situation or problem in a particular way or with a particular attitude”の意を示す approach は，通常，他動詞形で用いられることになる。

ルーマニア語において，（英語動詞 enter の概念表示に相当する）intra と異なる統語的特徴の一つは，以下⑿に示されるように，intra が自動詞であるのに対し，apropia は他動詞であることである。

⑿ El a intrat in cameră prin fereastră.
He entered in the room through the window

つまり，上出⑾は再帰動詞として「～に自分自身を近づける」という解釈になろうが，そこに属格概念表示の de が用いられることによって，自分自身とスーパーマーケットが各々「部分と全体」の所属関係に見なされ，後者の場所名詞句が示す landmark には「到達点（TO）」概念に類似した解釈が与えられることになる[40]。同時に，ロマンス諸語起源における再帰動詞の多くが（それらを借用した）英語では一般他動詞化（つまり非再帰動詞化）した過程もここに相まることで，結果として，英語でいう［approach NP］の形式が生じたと考えられる。

以上の理由から，次の⒀の語彙概念構造を持つと想定される英語動詞

---

[40] 同様の意味解釈は，以下［1］に示されるように，スペイン語においても観察される。

［1］《行き先》 …への，…に至る，elcamino *de* Madrid マドリードへの道． En camino *de* casa 家に帰る途中で

—*SDEJ*（s. v. de, *prep.* 14）

ロマンス諸語における属格概念表示前置詞が landmark への「到達点」認識を帯びる場合の意味論的メカニズムについてさらに詳しくは福森（2007）参照。なお，次の［2］に示されるように，属格概念表示前置詞は用いられていないものの，古英語には，again の属格形である against と等価の概念を用いることで，landmark への「帰属」認識（厳密には「方向（TOWARD）」認識）の解釈が生じる事例が存在する。

［2］hé lét him pá of handum léofne fléogan *hafoc wit pǽas holtes,* and tó pære hilde stop;

—上野 他（1997: 2）（イタリック筆者）

approach について，

⒀
$$\left[\begin{array}{l} \text{approach} \\ \text{V} \\ \underline{\quad\quad}\ \langle \text{NP}_j \rangle \\ [_{\text{Event}}\ \text{COME}\ ([_{\text{Thing}}\ \quad]_i\ [_{\text{Path}}\ \text{TO}\ ([_{\text{Place}}\ \text{CLOSE}\ ([_{\text{Thing}}\ \quad]_j)\,]\,)\,]\,)\,] \end{array}\right]$$

上出⑺および（９ｂ）における形態と意味との関係は，共時的には，前出⑶の変換プロセスに基づき，下記⒁に示される統語上の操作が行われていることが導き出される[41]。

---

[41] 「反証可能性」および「再現性」をより見つめるには，本稿で扱った以外の（主としてロマンス諸語からの借用語である）英語動詞について，現代英語では本来的に他動詞である一方，前置詞を後続させて与格名詞句を従えた場合，そのプロトタイプ的意味から（品詞の転換によって判断される）「遠い」派生義を持つものをさらに検証していかなければならない。紙面の都合上，今後の研究課題としたい。なお，たとえば米語の自動詞用法で“to talk socially with someone”（cf. *LDCE*（s.v. visit, *v.* 5））を意味する［visit with NP］や本論2.1.⑺で見た［break through NP］などは本論3.2.4.⑶の変換プロセスに沿わず，ここには含まない。その主たる理由として，それぞれ以下［１］―［２］が挙げられる。

［１］visit with NP

ａ．（そもそも抽象的事象表示ではなく，また［go to visit NP］の形式をとるように visit が移動動詞ではないこともさることながら）ここでの with は visit の本来的な内包概念が言語化されたものではない。

ｂ．たとえば，“She likes *visiting with* her neighbor.”であれば，端的には“She likes visiting [and talking] with somebody.”として捉えられる。

［２］break through NP

ａ．（[go to break NP］の形式をとるように break が移動動詞ではないこともさることながら）ここでの through は break の本来的な内包概念が言語化されたものではない。

ｂ．たとえば“In the shot, an arrow *broke through* my hand.”であれば，端的には“In the shot, an arrow broke [and went] through my hand.”として捉えられる。

他方，本稿で扱った［enter into NP］の概念は，通常，たとえば［*enter and↗

⑭ $[_{Event}\ \mathrm{COME}\ ([_{Thing}\ \ ]_i,\ [_{Path}\ \mathrm{TO}\ ([_{Place}\ \mathrm{CLOSE}\ ([_{Thing}\ \ ]_j)\,]\,)\,]\,)\,]$ to

言語化

したがって，以下⑮に見られるような［approach to NP］に関して，

⑮ The cat *approaches to* the tiger.　ねこはとらに似ている．【類】
It *approaches to* the excellence.

―*KDEC*（s.v. approach, *v.*）

approach 内には「移動後における位置（PLACE；CLOSE）」概念だけが残留することによって状態動詞の様相を呈することになる。この論考の妥当性は，次の（16 a - b）が「近似性」事象表示に関る場合，その容認度の差を生み出すことからも支持される[42]。

⑯ a．The cat *approaches to* the tiger.
b．*The cat *is approaching to* the tiger.

## 4．おわりに

本稿では，「Enter という英単語に into という前置詞を共起させると，

↘go into NP］などでは表示され得ず，この点においても上記［1］―［2］との意味論的様相は異なる。ただし、「上記［1］―［2］の両表現共に前置詞を後続させることで『言語容器を大きく』するわけだから，その内容物である『意味が多く』なる」（cf. Lakoff and Johnson（1980: 127, MORE OF FORM IS MORE OF CONTENT））とする認知言語学的視座からは，［visit NP］／［break NP］各々そのものが表示する意味よりも「遠く」なるという見方は可能となる。

⑫ 本論3.2.4.（16 b）が類似性における「段階的進行」表示であれば容認可。

enter 単独で用いられる場合と比較してなぜ意味が変わるのか」という実際に学生から受けた質問主旨を起点として，主に「比喩のフィルター」，「包含概念の言語化」，「品詞の転換」を活用することで論が展開された。そして，導き出された変換プロセスの「反証可能性」および「再現性」についても考察が進められた。確かに，本稿の論考はあくまでも認知科学研究領域に留まるものであり，何の加工もすることなしにそうした学生に提示できるものではない。また，高等教育内であっても教養としての英語教育の枠組みにおいてはそのまま提示できるものでもない。しかしながら，たとえそのような場合であっても，たとえば「他動詞 enter は抽象的事象を示すためにも用いられる。それと区別して，元々の意味から『離れた』意味を表すために，enter が内包している［INTO］を外に出すことで動詞と目的語との距離を『離して』いるんだよ。他の例で言うと…」など，十分な厳密さを伴わなくともその研究成果を簡潔な形で提示することが，少なくとも本稿冒頭で述べた「形式とその日本語訳を一つひとつ機械的に丸暗記していきなさい」とする指導よりは知的欲求に応えることができると考えられる。我々教壇に立つ者は，言語文化としての「知の教育」のあり方に真摯に向き合う上でも，日々留まることなく研究と教育とを両翼飛行させなければならない。自戒の念を込めて言っている。

**謝　辞**

末筆となりましたが，福井工業大学 小山 政史先生（英語教育学・言語文化学），阿武　尚人氏（大阪府立大学大学院生）（英語学・言語文化学）には拙稿の隅々までお目通し頂き，貴重なご助言ばかり頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

**Bibliography**[43]

Anno, N.（2014）“A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case

[43] 【Film DVDs】について，邦題が存在する場合のみ記すこととする。

of English Business Terms,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea* (Anul Ⅳ, Nr. 6), 115–122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Gruber, J. S. (1976) *Lexical Structres in Syntax and Semantics.* Amsterdam: North-Holland Publishing.

Hopper, P. J. and S. A. Thompson (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse,” *Language,* 56: 251–299.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structure.* Cambridge: MIT Press.

Keller, H. (1902) *The Story of My Life.* New York: Bantam Books (1990).

Klipple, E. (1997) “Prepositions and Variation,” in Di Sciullo (ed.) *Projections and Interface Conditions: Essays on Modularity,* 74–108. London: Oxford University Press.

Koyama, M. (2012) “An Applied Study of the Mechanism of Wh-Movement to English Education,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea* (Anul Ⅱ, Nr. 4), 174–180. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought.* New York: Basic Books.

Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adolescentului.* Brașov: Universitatea Transilvania: Faculatatea de Psihologie și Ştiințe ale Educației.

Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Teaching Way for Japanese Students: through the Concepts of English Prepositions,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea* (Anul Ⅱ, Nr. 2), 17–24. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Study of English Education through Cultural Frame: from a Comparative Perspective with Japanese Identity,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea* (Anul Ⅱ, Nr. 3), 98–108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2012) “Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan: from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea* (Anul Ⅲ, Nr. 4), 21–31. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2013) “Nation and Language,” in Constantinescu, M. et. al.,

*Omul și Societatea*（Anul Ⅲ, Nr. 5), 45–55. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2014）“A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies' System at the International Course and the English Seminar of Kinki University: along with the UNESCO's Recommendation concerning International Education,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*（Anul Ⅳ, Nr. 6), 8–18. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（forthcoming）“A Cognitive Approach to Japanese Popular Culture: through the Love Songs of *Koji TAMAKI*,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*（Anul Ⅰ, Nr. 1). Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. et al（eds.）（2011）*Philosophia Militans.*（Anul Ⅱ, Nr. 3）Pitești: Rotarymond.

Moriyama, T. et al（eds.）（2012）*Philosophia Militans.*（Anul Ⅱ, Nr. 4）Pitești: Rotarymond.

Moriyama, T., M. Koyama, O. Moriyama et al.（2012）*Soarele*（『太陽』）（vol. 2). Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T., O. Moriyama et al.（2012）*Soarele*（『太陽』）（vol. 1). Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Ritter, E. and S. Rosen（1996）“Strong and Weak Predicates: Reducing the Lexical Burden,” *Linguistic Analysis,* 26: 29–62.

Talmy, L.（1985）“Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms,” in Shopen, T.（ed.）*Language Typology and Syntactic Description III: Grammatical Categories and the Lexicon,* 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.

Yoneyama, M.（2005）“An Analysis of *Enter,*” *Seikei Review of English Studies,* 9: 45–56.

池上嘉彦（1975）『意味論』大修館書店：東京.

上野義和（1995）『英語の仕組み―意味論的研究―』. 英潮社：東京.

上野義和 他（1997）『古英語の世界へ―モルドンの戦い―』. 松柏社：東京.

上野義和・森山智浩（2003）『イメージ＆カテゴリーの英単語』. かんぽう：東京.

上野義和・森山智浩（2008）「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革（その８）―中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案：文構造と意味―」『研究論叢』第71号, pp.1–29. 京都外国語大学国際言語平和研究所：京都.

上野義和・森山智浩（2010）「異言語教育と言語文化（その１）―FD 改革下にお

ける語学教育のあり方を巡って―」『京都外国語大学研究論叢』第74号，pp.1-21．京都外国語大学国際言語平和研究所：京都.
上野義和・森山智浩（2012）「異言語教育と言語文化（その４）―メタファー研究の再考と言語文化教育の展開―」『京都外国語大学研究論叢』第79号，pp.1-21．京都外国語大学国際言語平和研究所：京都.
上野義和・森山智浩 他（2002）『認知意味論の諸相―身体性と空間の認識―』．松柏社：東京.
上野義和・森山智浩　他（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法―認知言語学的アプローチ―』．英宝社：東京.
日下部徳次（1955）『前置詞（上）」（英文法シリーズ）．研究社：東京.
福森雅史（2007）『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究―スペイン語・ポルトガル語・英語を通して―』（大阪大學言語社會學會博士論文シリーズ Vol. 42）．大阪大学言語社会学会：大阪.
福森雅史（2009）「異言語間にまたがる「個」の捉え方と言語教育―SELFへの認知言語学的アプローチ―」『FD改革下における語学教員への７人の新提案―認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から―』，pp.309-350．星雲社：愛知.
松本曜（1997）「空間移動の表現とその拡張」『空間と移動の表現』（日英語比較選書⑹），pp.123-125．研究社：東京.
森山智浩（2008）「英語動詞 *take* に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育―認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して―」『近畿大学英語研究会紀要』第２号，pp.79-98．近畿大学英語研究会：大阪.
森山智浩（2012）「ルーマニア語動詞 *alerga, fugi, curge, couduce* と英語動詞 *run* との概念比較研究―認知言語学と言語文化のインターフェイス―」『文学・芸術・文化』第24巻第１号，pp.189-235．近畿大学文芸学部：大阪.
森山智浩・髙橋紀穂・田保 顕・藤原 真名夫・カール ノーメンセン・森山オアナ 他（2009）『FD改革下における語学教員への７人の新提案―認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から―』．星雲社：愛知.
森山智浩・髙橋紀穂・田保 顕・藤原 真名夫・カール ノーメンセン・入学直哉・森山オアナ　他（2010）『英語前置詞の概念―認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から―』（FD語学教育改革シリーズ１）ブイツーソリューション：愛知.
森山智浩・中桐謙一郎・小山政史・森山オアナ他（2012）『Let's Vocabucize1000 !』松柏社：東京.

**【Dictionaries】**

［*DELP*］　瀬戸賢一他（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』．小学館：東京.

［*DEWME*］　小島義郎 他（編）（2004）『英語語義語源辞典』．三省堂：東京．
［*GEJD*］　小西友七・南出康世（編）（2002）『ジーニアス英和大辞典』．大修館書店：東京．
［*KDEC*］　Ichikawa, H. et al.（eds.）（1995）*The Kenkyusha Dictionary of English Collocations*（市川繁治郎 他（編）『新編 英和活用大事典』）．Tokyo: Kenkyusha.
［*KDEE*］　寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』．研究社：東京．
［*LDCE*］　Quirk, R.（ed.）（1987）*Longman Dictionary of Contemporary English.* Longman: London.
［*MJJD*］　北原保雄（編）（2002）『明鏡国語辞典』．大修館書店：東京．
［*OALD*］　Hornby, A. S.（ed.）（1995）*Oxford Advanced Learner's Dictionary.* London: Oxford University Press.
［*OED*］　Burchfield, R. W.（ed.）（1978）*The Oxford English Dictionary.* Oxford: Clarendon Press.
［*SDEJ*］　桑名一博 他（編）（1989）『西和中辞典』．小学館：東京．

**【Film DVDs】**

*Anne of Green Gables*（1985）（邦題：『赤毛のアン』）．Sullivan Films.
*Bones*（2005）（邦題：『ボーンズ―骨は語る―』），Episode: The Parts in the Sum of the Whole（2010）．Far Field Productions.
*Days of Thunder*（1990）（邦題：『デイズ・オブ・サンダー』）．Don Simpson/Jerry Bruckheimer Films.
*Ever After*（1998）（邦題：『エバー・アフター』）．Twentieth Century Fox.
*Failure to Launch*（2006）（邦題：『恋するレシピ～理想のオトコの作り方～』）．Paramount Pictures.
*I Am Sam*（2001）（邦題：『アイ・アム・サム』）．New Line Cinema.
*Lords of Dogtown*（2005）（邦題：『ロード・オブ・ドッグタウン』）．Columbia Pictures Corporation.
*Mona Lisa Smile*（2003）（邦題：『モナリザ・スマイル』）．Revolution Studios.
*Negotiator, The*（1998）（邦題：『交渉人』）．Regency Enterprises.
*Power Rangers Mystic Force*（2006）（邦題：『パワーレンジャー・ミスティックフォース』），Episode: Broken Spell: Part 1（2006）．BVS Entertainment Inc.
*Pulp Fiction*（1994）（邦題：『パルプ・フィクション』）．Miramax Films.
*Robot Chicken*（2005），Episode: Vegetable Fun Fest（2005）．Stoopid Buddy Stoodios.
*Rocky IV*（1985）（邦題：『ロッキー４』）．United Artists.
*Rocky V*（1990）（邦題：『ロッキー５』）．United Artists.
*Tengen Toppa Gurren Lagann*（2007）．Aniplex.

**【Websites】**

*Online Etymological Dictionary*

URL：http://www.etymonline.com/（アクセス日：2014年11月21日）

*USN, Interview Max O'connor, Former Mr England*

URL：http://uk.usn-sport.com/w/en/get-motivated/ask-the-experts/interview-max-oconnor-former-mr-england/（アクセス日：2014年11月11日）

『近畿大学法学部』

URL：http://www.kindai.ac.jp/law/（アクセス日：2014年11月15日）